

Aグループの最終発表

第4回1F地域塾

朱 鉦(AグループGM)

2022年10月1日

目次

1. これまでの振り返り
2. 塾生の「学び」
3. 今後に向けて

1. これまでの振り返り

- Aグループのメンバー

多様なメンバー構成で、社会的な視点と技術的な視点を両方から討論してきた。

- ふたば未来学園生徒 5名
- 地元住民 2名
- 県外住民 2名

オブザーバー:

第1回 (社会) 森口さん、福地さん、松岡さん; (技術) 東電-日比さん

第2回 (社会) 鈴木さん、崎田さん; (技術) 経産省-福田さん

第3回 (社会) 小磯さん; (技術) 東電-木元さん

1. これまでの振り返り

- グループ討論で出た論点

＜第1回 7/16＞ 知りたい、語りたい、学びたいこと

- ・ 1F廃炉作業の今の進捗とこれからの予定を知りたい。トリチウム水の海洋放出についても議論したい。
- ・ 地域内外の人の福島や原発事故に対する認識が違っている。
- ・ 「廃炉の終了」とは何か？
- ・ 「復興」とは何か？よそ者に決められるのではなく、地域の人々自身が安心して暮らせるような「心の復興」によって、地域の復興を定義すべきなのでは。
- ・ 現在世代の記憶、教訓を将来世代に引き継ぐために、将来に向けた地域の新しいシンボルの活用を考える必要がある。

→ 「問いの共有」

1. これまでの振り返り

* 夏休みのMTG(8/8、8/28)

- ・感想を交流し、他のグループの議論から新しい見解を発見することで、自分の考えを発展した。(例: 1F遺構保存の選択肢、多様な記憶伝承の方法)
- ・廃炉の予習、その中で感じた情報提供の問題点(量はOK、わかりやすさは…)

<第2回 9/10> 1F廃炉の現状と将来像を考える

- ・取り出された燃料デブリの処分、放射性廃棄物の処分と安全性を知りたい
- ・これまでの「決められことを市民を説得する」という東電/国と地域社会との対話方式に対し疑問する。
- ・若い世代の記憶風化の懸念がある。1F廃炉の将来像を考える際に、記憶伝承の取り組みが求められる。
- ・地域の未来と1F廃炉とは関わっていることから、両者を関連しながら議論することが大事である。そのため、幅広い人が参加する地域社会の将来像を話し合う場が必要である。

1. これまでの振り返り

＜第3回 9/17＞ 1F視察、地域目線で見える1F廃炉

- ・視察後の感想：進捗と現状を知った、1F廃炉と地域社会とは分断している感覚、1F遺構の保存にも現実的な限界がある

- ・「復興計画が盛りすぎ」？

→廃炉政策・復興政策の制定プロセスでの地域社会の参加不足、地域のニーズが伝わっていない

- ・今後、地域将来像を議論するために、地域社会も参加した対話の場の構築が必要である。

- ・その場は具体的にどう設計していくかまだ問題が残っているが、これから話し続けたい。

2. 塾生の「学び」

Q1: 地域塾で新しい知見を得ましたか？

Q2: 1F廃炉の将来像 or 地域社会の将来像について、今どう考えていますか？

Q3: 以前と比べ、自分の考えや思いに何か変化がありますか？

Q4: 残っている疑問



2. 塾生の「学び」

Q1: 地域塾で新しい知見を得ましたか？

1) 廃炉に関する知識が増えた

- 工程の現状、ALPS処理水、1F視察

2) 1F廃炉の将来像について

– 1F廃炉の将来像に、地域住民の意見も入る余地があるというコメントが印象に残っている

- 「廃炉のゴール」「復興のゴール」の定義付け

- 廃炉＝解体と思っていたが、1Fの遺産化の発想が新鮮

3) 東電と地域社会の関係

「地域のために」という思いは共有されていると感じるが、「東電と地域はお互い微妙なすれ違いながら前に進んでいくような感じ…」

2. 塾生の「学び」

Q2: 1F廃炉の将来像 or 地域社会の将来像について、今どう考えていますか？

1) 1Fの将来像について

- 未来につなぐために、遺産化に自身は賛成するが、廃炉の課題や大熊町、双葉町など避難を余儀なくされた方々のお話を聞くと、なかなか難しいかもしれない
- 遺産化しなくても、未来に何かを残すのが大事→将来地域のシンボルとは何か？

2) 地域社会の将来像

- 関係人口を増やすべき(新産業を育成するなど)
- そもそも、「地域社会」の範囲は？

「1F廃炉及び地域社会の将来像については、国や東電が地域住民と対話を重ねながら作り上げていくものだ」

2. 塾生の「学び」

Q3: 以前と比べ、自分の考えや思いに何か変化がありますか？

1) 自分ごと意識の喚起

- 1Fに怖い、距離感→身近なこと
- 技術の問題→地域社会と複雑に絡み合っている
- 自分とは関係ない「他人事」→双葉郡だけでなく、福島だけでなく、1F廃炉は日本全国に関わっている。

2) 相互(?)理解の促進

被災者として、東電や国の意見を理解しようとすることも重要である

3) 地域社会の将来像について

- 合意形成が困難
- 代表性の確保が疑問

2. 塾生の「学び」

Q4: 残っている疑問

- ・陸側遮水壁の作り方を知りたい
- ・「地域のオーナーシップ」と「政府のリーダーシップ」の関係性
どのように、どこまで参加するのか？



3. 今後に向けて

- より幅広い人に関心を持ってもらうために、自分にできることをしたい。
- 学びを深めたい
- 第2期1F地域塾？

1F地域塾をスタートとし、いろいろなことを始めよう！

ご清聴ありがとうございました！

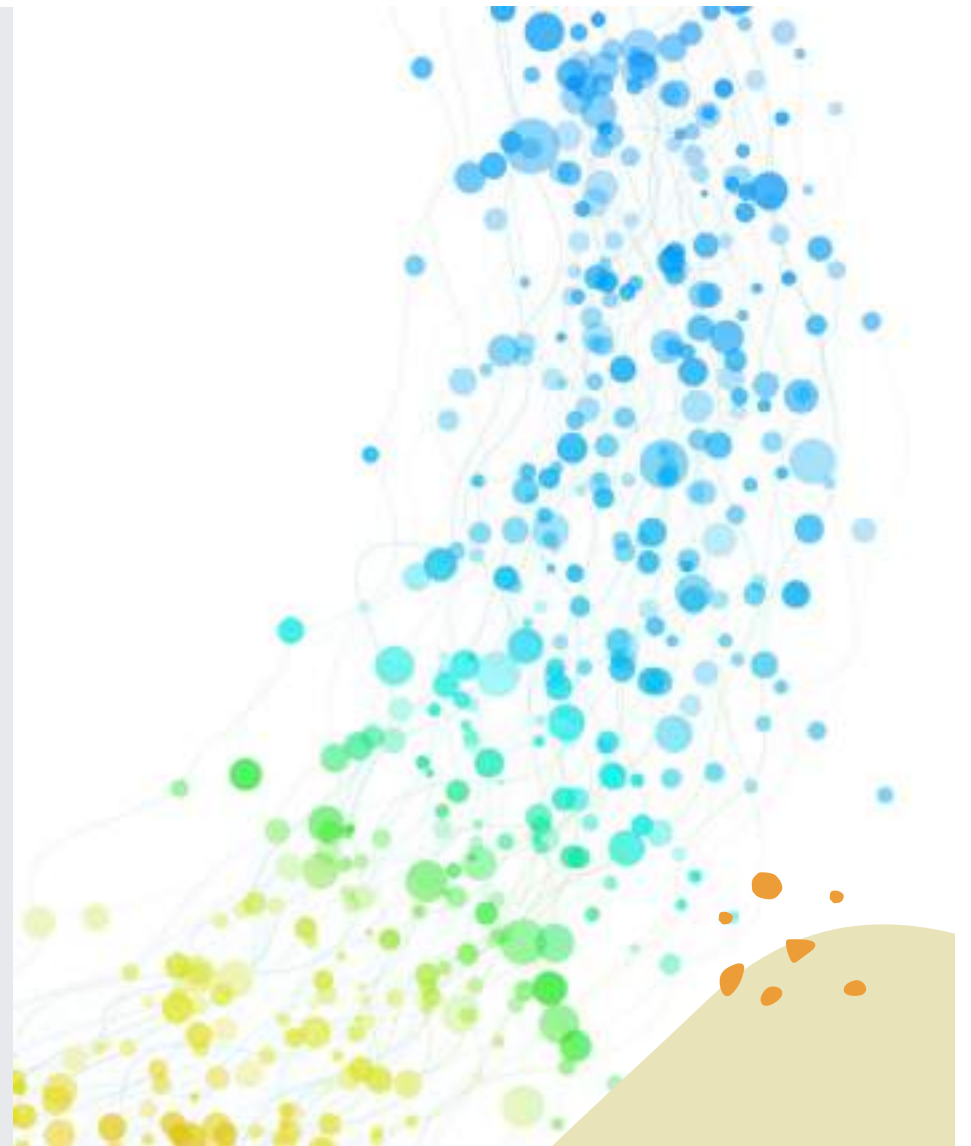
1F地域塾 Bグループ発表

田代滉介

石上琴乃

佐藤心花

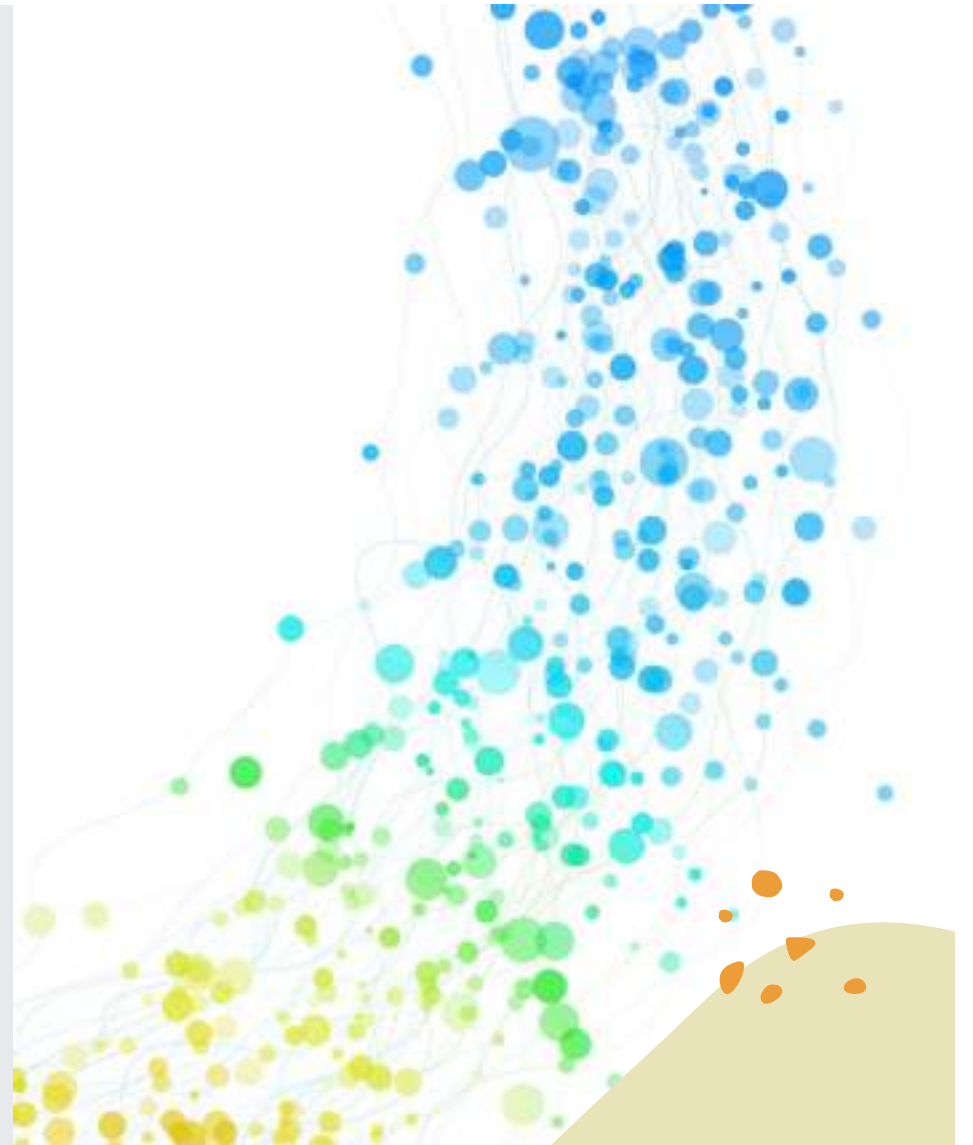
2022年10月1日



Bグループ 概要

- ・ふたば未来生徒 5人
- ・伝承館語り部
- ・経営者
- ・元東京電力
- ・早稲田大学大学院(GM)

Bグループの主要な論点



論点(1)「将来像の議論」について

- ・課題山積、考えるにはまだ早い
- ・それでも考えておいた方がいい、歳をとってしまう
- ・議論の場としては結論や目的よりもまず思いを共有しよう
- ・将来像を語るためには、それ以前に対話の環境をつくることが必要
- ・東電と地域側で対話に関する認識がズレている、同じテーブルならそれでいいのか？
- ・肩書ではなく一人と一人として話せる場が必要

論点(2)「将来世代」という言葉について

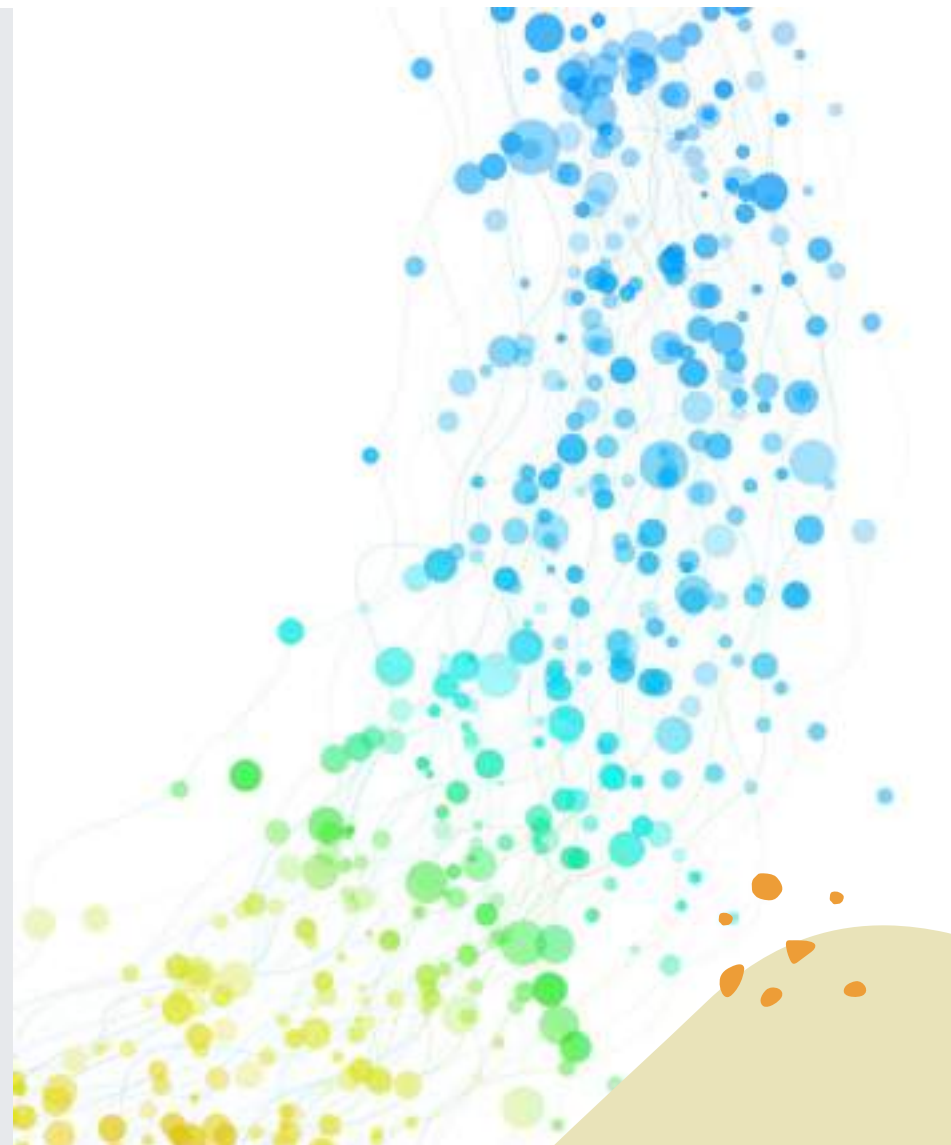
- ・勝手に期待される、大人はどう感じているのか？
- ・若者に丸投げするような態度、いかがなものか
- ・大人のために探究活動をしているわけではない
- ・無責任にツケを残すべきではない

論点(3)「原発の倫理」

- ・問題は自分たちの生き方から。
- ・原発は非倫理的であるほど安い
- ・「私ももう一人の東電」
- ・自分の加害者性を認識するところから。自分が変わろうとする
- ・人対人で話すのが対話。そういう中で恨みが消えていく

アンケート結果

- ・グループ内アンケートの結果に基づくもの
- ・回答内容を原則そのまま掲載
- ・回答者を特定できないよう順番は入替え済



①地域塾で新たに学んだこと、意見や思いの変化など(1)

- ・対話を通じて、被災者(被害者)として多くの自由を奪われた理不尽な思いとともに、自分はどうしたいのか、地域をどうしたいのか、そのために自分はなにをすべきなのか、みんなが自分たちの将来をそれぞれ選択し行動しなければ、自分の人生は変わらないと感じ、何をしてもらいたいよりも、自らの行動をどうするかのように意識が傾いた。
- ・東電と地域の人やそれ以外の人との ” 対話 ” が重要であり、直接話すことの大事さを学んだ
- ・地元に関わり添う思いが実感出来ました。

①地域塾で新たに学んだこと、意見や思いの変化など(2)

・廃炉は地域だけの問題ではなく、国全体の問題として捉えるべきです。東電は都市部とも関係が強いというのは常識です。地域でも廃炉に対して意見を言う人は1部ですし、国全体となるともっと少なくなるのは容易に想像できます。原子力について一部の人が理解していてもその1部の関心のある人の意見しか集まりません。原子力は専門的で難しいからこそ多くの人に理解して貰う必要性を感じます。

・知識や感覚に個人差が存在し、それによる互いの理解不足が壁となる場面があるという事を再認識しました。

・特になし

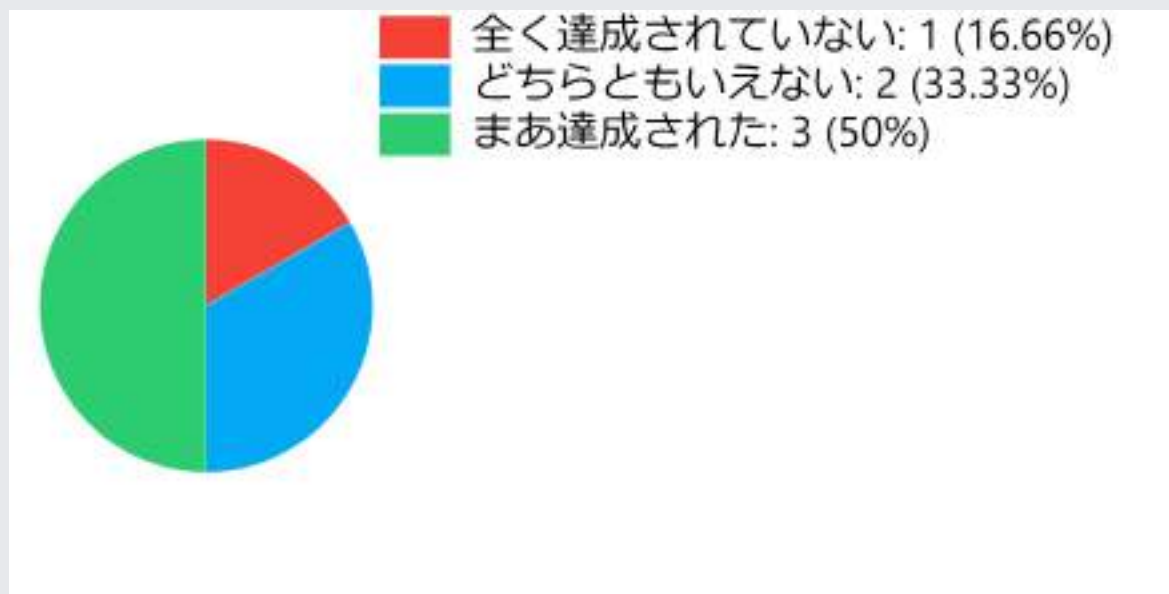
②地域塾を通して疑問が深まったこと、より知りたいと思ったこと

- ・様々な立場の方のお話をじっくりと聞きたいと思いました。また、双葉郡や福島県だけでなく、震災・原発事故への対応において関わってきた地域や今後関わるであろう知己についても考えてみたいです。
- ・東電の廃炉カンパニーについて。早稲田大学の研究拠点としての福島の今後。

③地域塾で特に印象に残った出来事・発言

- ・福島事故の倫理的側面
- ・息子が赤紙を貰ったようだったというお話。
- ・対話だけしていたら良いのか？
- ・廃炉の先の未来を語るという事。
- ・同世代の人達とも、専門家の方の説明に対する理解度に大きな違いを感じたこと
- ・1Fに視察に行った際に1号機の現状を見た事 テレビや写真で見るのと大きく違っていた。

④廃炉について「知りたいこと」「議論したいこと」「学びたいこと」は達成されたか



⑤地域塾での体験を踏まえ、「廃炉の先」について 今どのように考えているか(1)

- ・負の遺産として残すべきだと思う でもそれは地域、国、東電の人たちの合意の上で行うべき
- ・遺構として1Fをそのままの姿で残す事は難しいと感じました。燃料や瓦礫撤去など廃炉に必要な作業を最優先に考えるべきです。ですが、1Fを残す事が原子力災害を実感する近道だと思います。1F廃炉を進めながら遺構化する方法も同時に考える必要があると思いました。1Fは被害の悲惨さを伝えるものであり続ける必要があります。しかし、遺構になる頃には1F(双葉郡)は復興していると思うので復興のシンボルとしても作用して欲しいと思います。

⑤地域塾での体験を踏まえ、「廃炉の先」について 今どのように考えているか(2)

- ・先は、何世代先のことかわからないから、「廃炉とともにある地域」として、今生きる世代、若者がよりよく生きるために、なにをすべきか考えたほうがよいと感じた。
- ・悪い状態を普通に返すのではなく、「悪い状態」をビジネスチャンスととらえるなどして、地域の抱える課題を有効活用していけたらいいな、と考えています。
- ・震災後に訪れたチェルノブイリ原発は戦争の影響を受けた。何故廃炉の先を考えるとときにポジティブ思考になるのかが不思議。
- ・理解を深めること、議論をするための継続的な取り組み。

⑥地域塾の運営・形式や「対話」の在り方について てどう思うか(1)

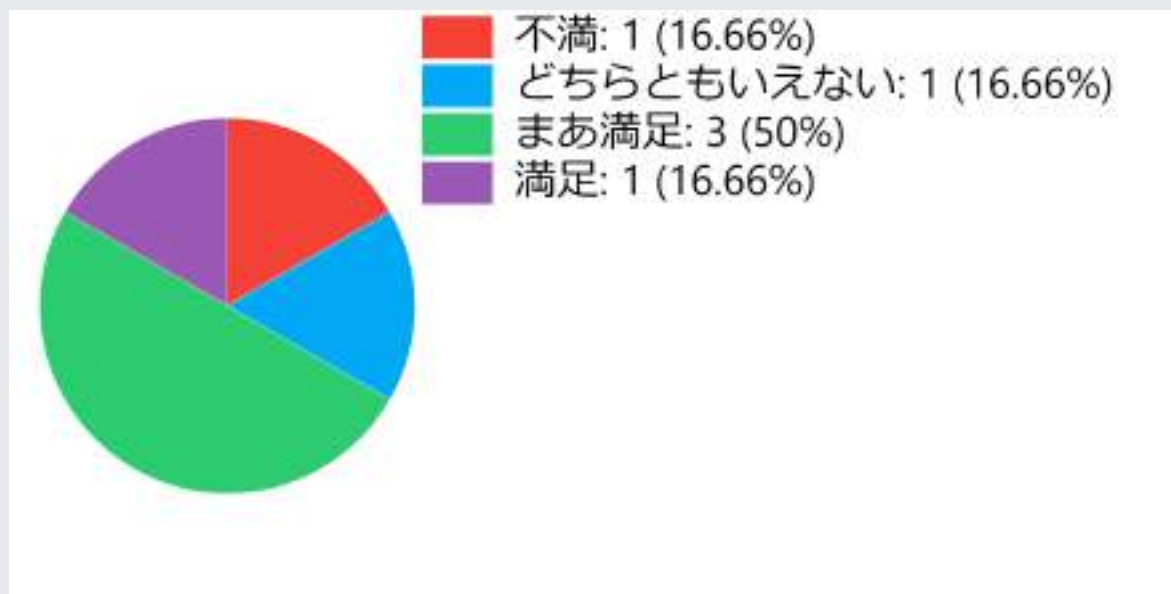
・他グループとの関わりはほとんどありませんでしたし、初期段階で地域塾の目的や具体的な活動の見通しが不明確だったように感じています。また、冒頭で大幅に予定時間をオーバーすることも多く、その後のグループ内ディスカッションの時間が削られてしまう状況は改善すべきだと思います。

・廃炉の事や地域のことについて知れるのは嬉しいが大人だけで盛り上がるのは少し良くないのではと思っている。子供の発言の場を全体会でも増やしてもいいのではと思った

⑥地域塾の運営・形式や「対話」の在り方について どう思うか(2)

- ・様々な立場の方々と話せる(話を聞ける)機会となっていましたがその立場を気にしながらの話し合いになってしまっていたと思います。全体討論は特に双葉郡で仕事をしている方、原発に関わる方の発言が中心で、多くのふたば未来の生徒が参加している意味が感じられにくかったです。
- ・対話とはいいい難い。
- ・良い運営ができていると思います。
- ・当面は、この取り組みを継続し、発展させる。

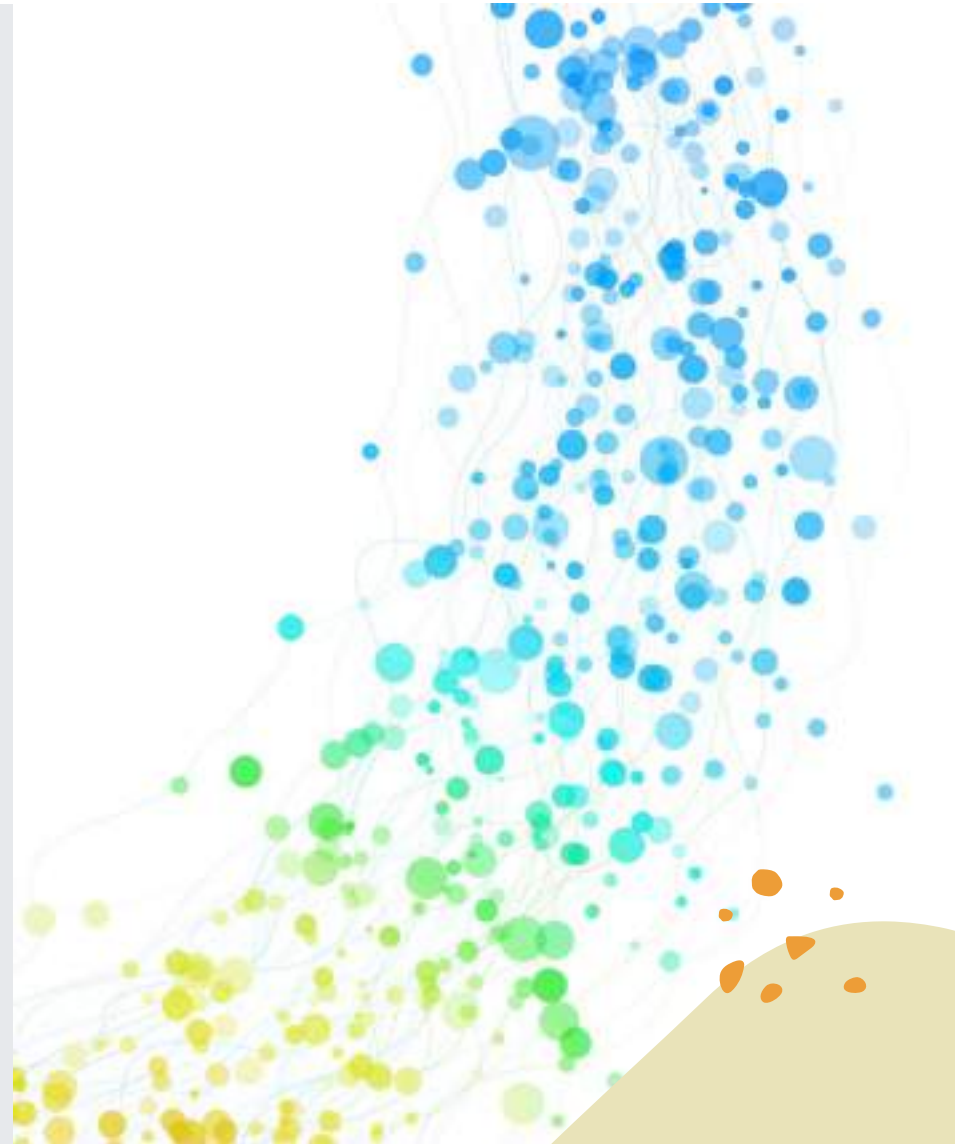
⑦総合的に見て今回の地域塾の満足度はどれほどだったか



⑧その他(自由記述)

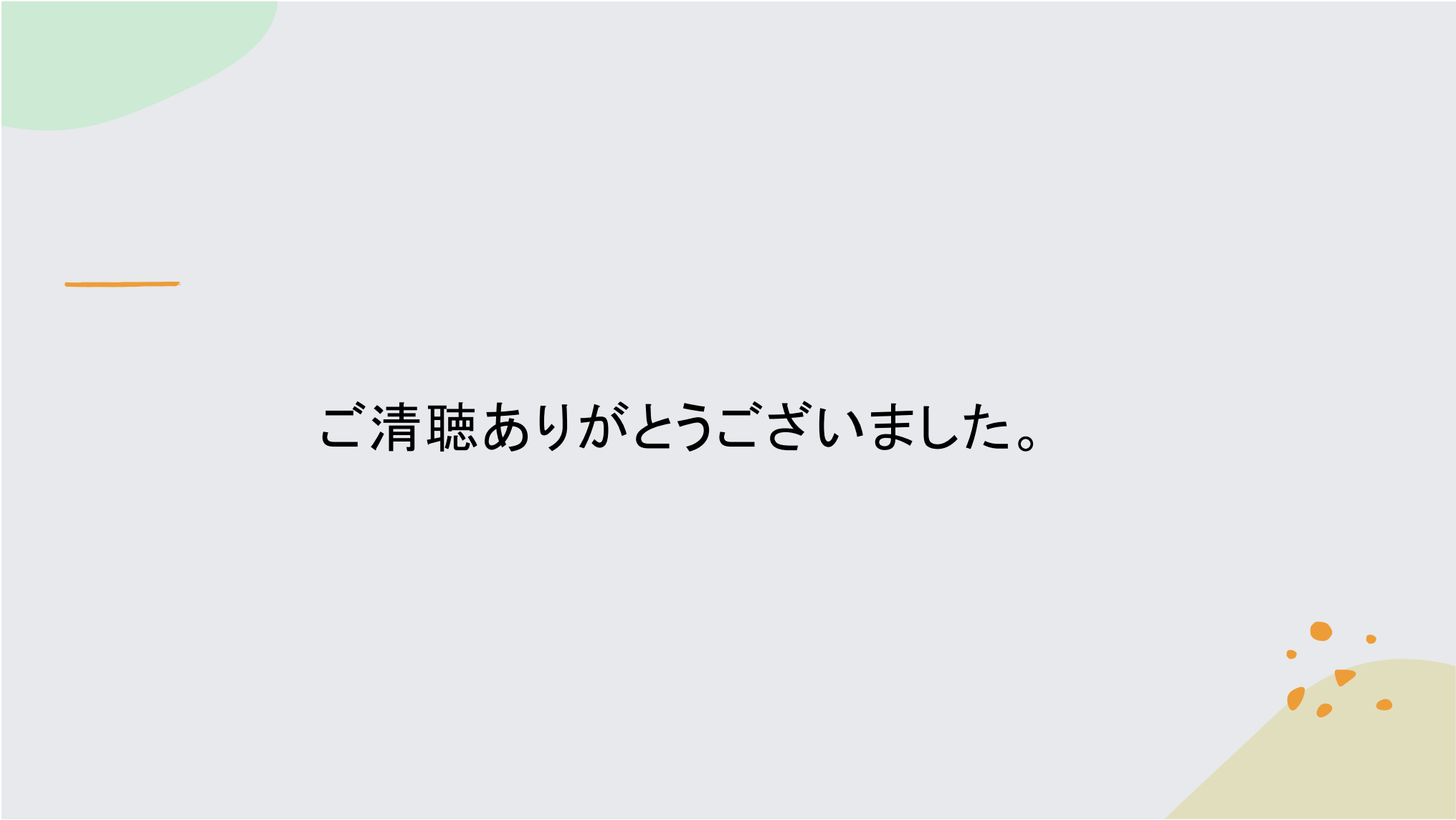
- ・楽しい時間を共有させて頂きありがとうございました。
- ・話し合いが円滑に進行するよう司会役をして下さりありがとうございました。雰囲気作りや指名してくれることで発言しやすかったです。
- ・バタフライエフェクトと考えるのならば、廃炉について忌憚なく語る場であった。と結びたいと思ったけれども腑に落ちない。ただ知り合えなかった方達と様々な胸の思いを共有出来た事に関してはよかったと思う。そこからどのような事柄が生まれるのか、これから見届けていきたいと思う。

GMの所感



感じたこと

- ・「聞き役」として非常に勉強になった一方で、改めて立場間の隔たりも痛感し、まだ一塾生としては十分なコメントはできない
- ・塾生からも指摘の通り、「対話」の時間確保は優先されるべき
- ・初回で集約した「知りたいこと」等が運営に反映されていない
- ・全4回では「対話」には不十分。双方向的なコミュニケーションではなく「話し手」と「聞き手」が生じてしまいがちだった
- ・地域塾の「学びの場」としての機能は塾生間のコミュニケーションを主軸とすべきではないか



ご清聴ありがとうございました。

Cグループ 最終発表

グループC

遠藤・鬼沢・塩塚・菅波・鈴木・中島・新妻・松川・森山・四條
井上(オブザーバー)

今まで4回の地域塾を通して

生の声を聞き、語り合うことの重要性

- ・廃炉作業で何に取り組んでいるのか、何が問題なのか、知らずに過ごしてきた。学び、話し合う中でもっと知りたいと考えられるようになった。

- ・個々人が自身の興味・関心があること (例. 好きな物や生活と関わるもの) から入り、深掘し、多様な人と対話することで、考えが変化したり、新たな考えへと広がっていき、多様な観点から廃炉について考えることができる。

- ・住民の生活が日々変化していく中で、長期的な展望を話し合う難しさ、状況や相手の意見を理解すること、自分の考えを持つことの難しさを感じ、自分の中でも消化不良だった。

→しかし、話し合うこと・考えることを続けていくべきテーマだと感じた。

情報発信

- ・求める情報や媒体も職業や年齢など一人一人の属性により異なる。

→地域の人と意見交換や話し合いを行い、考えを深めていく過程で、何が必要なのか考えていくことが求められるのではないか。

今まで、4回の地域塾を通して

目の前の問題を解決していかないと前に進めないのではないかな。

* 自身の生活との関わりや興味・関心から入り、深堀すること

* 体験・想いといった**生の声を聞き、語り合う**ことで、「**知りたい**」・「**学びたい**」につながる。



自身の考えが変化したり、新たな考えへと広がっていき、廃炉についてや将来像を
考えていくことができる！

グループC ミーティング

第1回1F地域塾 (2022年7月16日)

- ・ 第1回 Cグループ グループ・ミーティング (2022年8月9日)
→ 第1回1F地域塾の振り返り+廃炉はどのような状態と考えるか
- ・ 第2回 Cグループ グループ・ミーティング (2022年8月27日)
→ どのような情報をどのような媒体から得たいのか

第2回1F地域塾 (2022年9月10日)

→

- ・ 第3回 Cグループ グループ・ミーティング (2022年9月16日)

第3回1F地域塾 (2022年9月17日)

第4回1F地域塾 (2022年10月1日)

各ミーティングの振り返り

第1回1F地域塾 (2022年7月16日) 自己紹介

～知りたいこと・話したいこと～

事実・現状

- ・ ニュースを通して情報を得ているが、**事実**を知りたい
- ・ 1F廃炉の**現状**を知りたい
- 海洋放出・トリチウムの現状について知りたい
- ・ **原発と地域の歴史**(今までどのような関わりがあったか)について知りたい

人々の想い

- ・ 人々(地域内外)が1Fに対して、どのように思っているのか、知りたい
- ・ 廃炉の終わりはどの段階なのか、何をもって廃炉なのか、地元の人がどのように考えているのか知りたい
- ・ 今後地域がどうなって欲しいのか、話したい

第1回 Cグループ グループ・ミーティング

第1回1F地域塾 振り返り

- ・ 廃炉のゴールを「ここがゴール」と最初から決めずに、その過程や段階を踏んでいって、廃炉について考えていきたい
- ・ 廃炉作業が何十年もかかる中で、今の生活という点にどのような影響を与えるのか。
- ・ 廃炉がいつ終わるのか、どこで終わりなのか全く見えない中で、直近の10年や、自分たちがこの問題をこの地域で取り組める間にどのような将来を見ていけるか考えたい
- ・ 日々捨てられていく汚染水がある状況では廃炉の先は考えられない

情報発信

- ・ 福島だけの問題ではないので、日本国中でどのようにしたら問題に向き合ってもらえるか、知ってもらえるかが重要

廃炉はどういった状況のことをいうのか

- ・最終的には燃料デブリが取り出せたとき
→デブリの処分方法等に関して**不確定要素がありすぎる**と感じている。どこも受け入れないとすると、福島第一原子力発電所内に最終処分場を引き受けるということになり得るかもしれないと懸念
- ・福島原子力発電所の安全性が確認されたときが終着点だと考えていたが、**その過程で出てきた汚染物質等も同じように安全性が確認された時が終着点**となるのではないかと

廃炉の先・伝承

- ・土地に行って地域の歴史(その地域で起こったこと)を感じることができなくなる(=きれいになってしまう)と風化し、人々の記憶や後世に受け継がれなくなってしまうのではないかと。
- ・原爆ドームのように次世代に教訓を伝えていくことは大切であるため、何も害が与えられない状態になってから次世代に残していくものを作り伝えていけることが理想
- ・どのように残すかについては、後世の人に決めてもらえばいいのではないかと。ただ廃炉の過程で、政治的決定として、**自分たちの意見が反映**されるような状況になっておくことが重要

第2回 cグループ グループ・ミーティング

→ どのような情報をどのような媒体から得たいのか

情報について

- ・世の中には誤った情報があふれているため、何が正しくて何が誤っているか情報が分からない。
- ・データに関しては、優しい言葉でかみ砕いた言葉にしないと、情報として発信しているけど伝わらない。伝える情報ではなく「伝わる情報」にしなければならないと考える
- ・発信者側が情報を隠ぺいする部分もあるかもしれない。発信者側も偽りない情報発信に努める必要がある。

第2回 cグループ グループ・ミーティング

情報発信

・原子力を勉強された先生たちの中でも、「絶対にダメ」という人たちと「問題ない」という人たちがいる。**両方の意見を比べながら見ることができる**モノが必要である。

・見てもらえないと意味がない。

→人によって興味、関心が違うため、何を知りたいのか、どんな媒体だったら分かりやすいのか、聞きたいと思うのか、実際に聞いてみないと分からない。地元の人と交流する場を深めて知っていき、それぞれに合わせた情報や方法が必要。

・色んな意見があって当然だと考える。先生と生徒のように「一対大勢」ではなく、学生や大人等、色んな人と語り合うことができる状況が一番いいのではないか。

情報発信の方法：学校教育

・若者に伝えるためには、学校教育として行うことが一番だと指摘があった。ただ「先生の主観、価値観」が押し付けられることがある。**事実だけを伝え、生徒たちが話す**ことで、生徒同士の原子力災害に関する理解が深まるのではないか。それをもとに、地域の人と話し合うといいのではないか。

第2回 1F地域塾

情報の切り口

- ・人によって考え方や求めている情報や興味持っていることが異なる。色々な視点から考え、話を聞き、物事考えながら物事に柔軟に対応し行動することが重要である。

→一人の人の意見をもって意見を言うのだけではなく、情報発信の場に色々な立場の人が必要で、聞く人側が選べるようにする必要がある。

- ・何か一つでも興味をもつことで、知ろう・学ぼうと思い、興味をもつことで、最終的に廃炉やその過程を見ていくことができればいいのではないかな。取っ掛かりの部分はたくさん用意することが求められる

情報発信

- ・地元から福島について等発信しないと、世界や日本中には伝わらないと考える。

→地元の人はどう思っているのかなどの、地域の人からの情報をもっと一緒に共有することが重要なのではないかな。

第3回 Cグループ グループ・ミーティング

- ・ 廃炉の先がどのようなものかいいか、自分自身の中でも考えられていない状況で議論が進んでいる状況

多様な観点からの意見

- ・ 東京電力からの情報も短い時間でかいつまんで聞いている状態である。他に色々なところの廃炉に関する情報共有があってもいいのではないか。

- ・ より多様な地元の方の声を聞く機会が必要
→ 東電の人の話だけでなく、地元の方が廃炉について今どう思っているのか、話を聞きたい。話を聞くことによって視野が広がると考えている。

第3回1F地域塾

伝え続けていくために

- ・ 30～40年でおさまらない問題であり、原発の悲惨さは写真や動画ではなかなか伝わりにくいため、残すことの大切さを実感した。
- ・ 正確な情報は見に行かないと分からないため、見に行くことが大切。実際に行ってみて疑問を感じて話し合うことが重要だと考える。
- ・ この問題は福島の問題だけではないので、日本全体の問題として見ていかなければならない。当事者意識をもてるように考え、議論して発信していかなければならない。
- ・ 将来像、廃炉の先を考えることは、今取り組むべき課題を考えることにつながる。100年後に至るまでに、将来像はどんどん変わっていくものだと考えられる。
→決定されるべき物事に声をとどけられるようにしていく必要がある。

今までの議論を踏まえて

私自身が感じたこと

→「情報」という言葉に違和感を覚えた。

多様な人々の生の声や想いを拾い上げる、一人一人が語ることがまず求められるのではないか。

グループ内での意見をもとに考えたこと

・ 地元の人々の**生の声や想い**を聞く場 + 語り合う場

・ 原発を運営する側と対比できる専門的な意見・情報を得られる場

→知識無い・分からない単語多い＝質問しづらい。場違い感。一人一人に寄り添う・感情。

* 自身の生活との関わりや興味・関心から入り、**「学びたい」・「知りたい」**

地元の人々の想いや体験・生の声を聞き、より多くの多様な人々の想いや考えを聞き、**語り合う**

まずは今取り組むべき課題を考え、目の前の課題に取り組むことで、

将来や廃炉の先を考えていくことにつながるのではないか。

Dグループ最終発表

倉重美優

大和田 徹

2022年10月1日@ふたば未来学園

発表内容

✓ 廃炉について

✓ 地域塾について

1. 廃炉について

これまでの議論

グループとしての『将来像』を設定する

→短期と長期に分けて考えてみよう！

それはいつ頃？

短期： 1年後 “処理水の海洋放出が予定されている将来”

長期： 30～40年後 “廃炉作業が完了し、制限がなくなる。
人やモノが自由に行き来できる将来”

理想の『将来像』は？

短期（１年後）

- ・「東電・行政・地域」相互の**信頼関係**が構築している。
- ・新たに国際教育研究拠点が整備され、**教育環境**が整備される。
- ・原発の状況が正しく外に**発信**され、地域の住民が状況が把握できる。
- ・新たな**風評被害**を受けずに生活できる。
- ・地域の産業（農林水産・商工観光業等）への被害を限りなく 0 にしたい。

理想の『将来像』は？

長期（30～40年後）

- ・ 原発のリスクがなくなり（減少し）、
子どもがいきいきと生活し、**安心して**子育てができる地域になっている。
- ・ 帰還が進み、県内外からも人が往来し、**活気あふれる**地域になっている。
- ・ 廃炉事業が地元産業に展開、経済活動が発展して**活力ある**地域になっている。
- ・ 1 F が原発事故を伝えるシンボル（遺産）となり、
記憶の継承の検討が進んでいる。

『将来像』実現のためにできることを考える

東電・専門家との対話を通して

Q 廃炉が完了した姿は決まっているの？

→廃炉とはリスクを下げることで、その先は東電だけが決めるのではなく、地域の皆さんで議論して一緒に考えていくこと

⇒**住民でも関われる（自分事）**

Q 廃炉の情報はどうすれば受け取れるの？

→情報発信の主な手法は、TV、新聞、HP、SNS（インフルエンサー）など。

HPでは、廃炉に携わる人を応援するサイトや1Fバーチャルツアーなども

⇒工夫した表現（エンタメやバラエティ、映画、漫画など手法は様々）

情報発信の重要性を再認識

『将来像』実現のためにできることを考える

1 F視察・東電との対話を通して

<視察の感想>

- ・ 実際に見ることで、廃炉に対する**イメージが変化**した。
(恐怖、不安 ⇒ 安全、まだ不安、課題はあるけど**進んでいる**)
- ・ 廃炉作業に**従事する人**がいるから廃炉が進んでいく。
- ・ 廃炉は世界にも**前例がない**こと、最先端の技術が集結している。
- ・ 原発を視察することに**観光**（ホープツーリズム）の可能性を感じた。

『将来像』実現のためにできることを考える

1 F視察・東電との対話を通して

<課題・可能性>

- ・ TVやネットの情報だけではリアルな情報は伝わらない。
風評被害をなくすためにも、**正しい情報の発信・受信**が重要。
- ・ 廃炉の取組を知ることで、東電・国と地域住民の**信頼関係**が構築される。
- ・ 廃炉の技術は浜通りの産業（技術・人材）に**貢献**する可能性を持っている。
- ・ 廃炉は全てをなくすことではなく、**記憶を残す**ことでなければならない。
- ・ 廃炉が進むことは**地域の願い**、地域全体で考えていかなければいけないこと。



2. 地域塾について

Dグループの参加者構成・実施形式

＊ 構成（10名）

- ・ 高校生4人
- ・ 大学/大学院生3人
- ・ 地域住民3人

＊ 実施形式

- ・ 第一回実施後の個別面談
- ・ 2回のオンライン会合

参加者の背景について

地域塾の参加動機

- ふたば未来学園の広島研修
- 早稲田の授業での紹介
- 外部イベント参加者からの紹介
- 研究会関係者からの紹介

個人的背景

- 他県での避難から福島に戻る
- 1F事故関連に勤務
- 町役場に勤務
- 福島に関心は強くなかった



共通項を探る

- 不安の中でも1Fについて考えようとする姿勢
 - 地元や福島への愛
 - 地域の方に配慮した考え方
 - 福島に関する情報量に制限があること
- 

Dグループにおける合意形成

- ・ 理想の将来像
- ・ 情報の重要性（正確さ、わかりやすさ）
- ・ 1F廃炉を安全に進めてもらいたい
- ・ 産業と地域の視点の重要性

廃炉を考える上での地域塾の役割

【1Fについて】

* 対話を通じて

- 東電の廃炉とは原発のリスクを減らすこと
- 廃炉の先は地域で考えていく必要
- 廃炉に地域住民が関与する余地
- 境界作業者の重要性

* 1F視察を通じて

- 廃炉の自分事化
- 震災遺構を残すべき

【地域について】

- 廃炉について聞きたくない、考えたくない人もいる
- 廃炉を考える上で地域との関わりを考えることは必要不可欠
- 復興していない部分

議論の展望

- 将来像のためにできること（ミクロ・マクロ）
- 廃炉作業員について
- 合理性と安全性
- 産業と復興
- 誰のための情報発信か



1F地域塾の評価点

- 1F視察や東電職員との対話の機会
- 地域で活躍する人の話をフラットに聞ける（対話・ラジオ）
- 年代を超えて意見を聞ける
- 違いを前提に、共に考えるというプロセス
- 全員に発言の機会がある

1F地域塾の改善点

- 話したいことがあっても時間が足りない
- 議論が深いところまで発展しない
- さらに地域外の人を増やして開いた場に

Eグループ アンケート報告

(敬称略)秋元 菜々美/根本 賢二/関口
雅浩/宇野 朗子/辻浦 羽彩/八木 香練/
山形 遥/麿 琉花/高垣 慶太

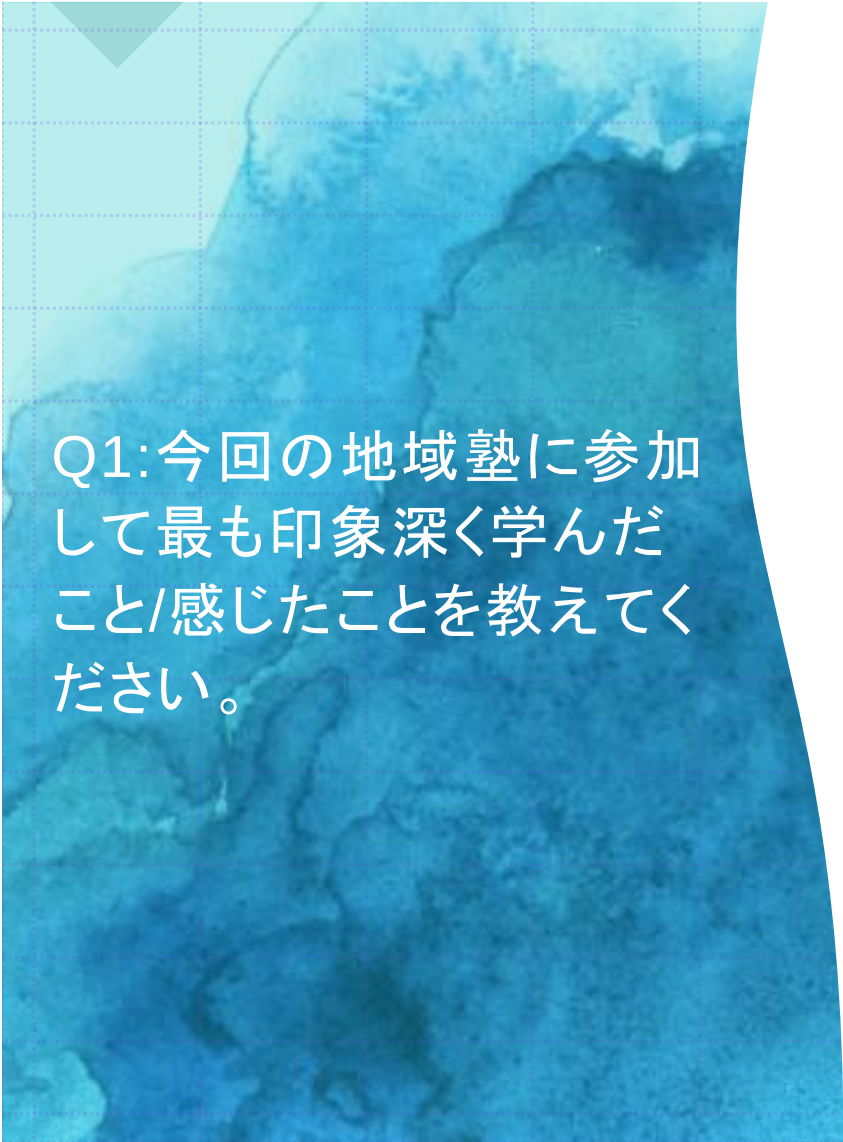


アンケートの 質問内容

Q1:今回の地域塾に参加して最も印象深く学んだこと/感じたことを教えてください。

Q2:これまでの地域塾での取り組みを踏まえ、ご自身が1F廃炉を考える上で最も大切だと思う事柄(考えるべきことや議論すべきこと、焦点を当てるべきことなど何でも)について教えてください。

Q3:(今回の地域塾での取り組みを踏まえて)今後も1F廃炉や復興について考える「対話の場」を創るとしたら、どのような場づくりをしたいか/どう継続すればより多くの人に参加しやすいか、ご自身のアイデアを教えてください。



Q1:今回の地域塾に参加して最も印象深く学んだこと/感じたことを教えてください。

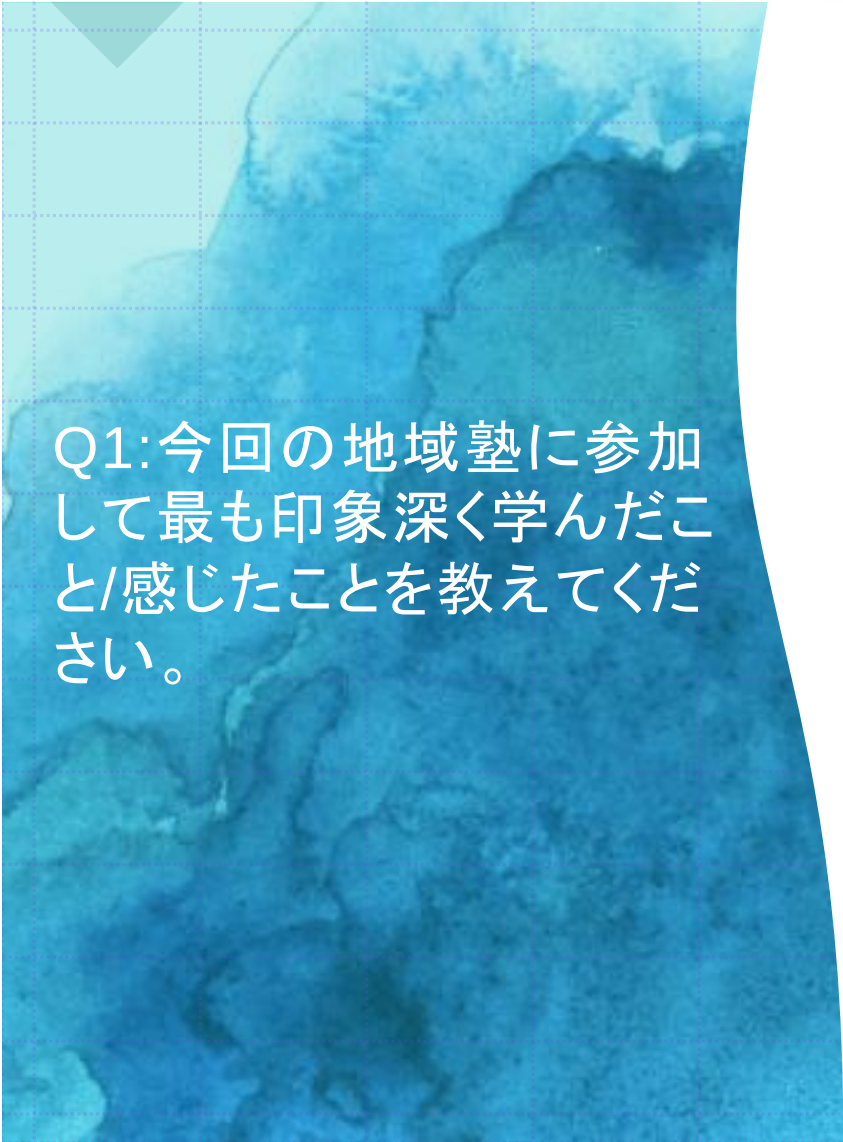
想像で考えていたことと、実際に見てみることで全く違うことを強く感じた。

一人一人が1Fの問題に対して独自の観点で見て、解決法を考えているのがすごいと感じた。

海洋放出の問題がひと続きになっている海の問題であるように、1Fの廃炉の問題や双葉郡の地域課題は、誰もが関係していることなので、その地域の人達だけでなく日本全国の様々な立場の人と話していく必要があるということ。

境界知作業者の役割と重要性。
1F廃炉に関して無関心でいられること。

地域と廃炉の根本的なつながりが消えつつあること。
(元の街の風景が消えていくことによる住民や元住民の廃炉への無関心)

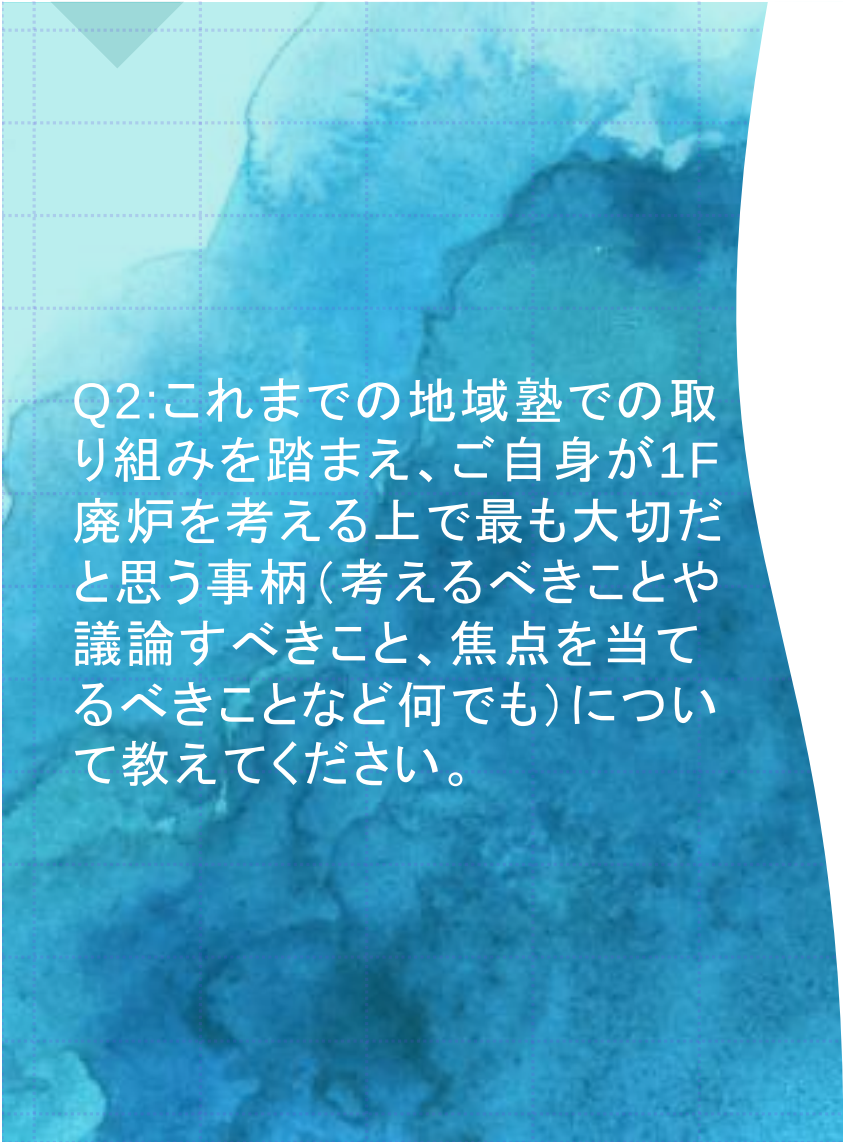


Q1:今回の地域塾に参加して最も印象深く学んだこと/感じたことを教えてください。

アーカイブ化、遺構化は最初私には思いつかなかったので知ることができて良かった。同世代で話すと似たような意見でまとまってしまうので様々な立場の人と話す機会が大切だと感じた。

福島原発事故現場を訪れたこと。そしてそれぞれに観たもの、感じたことが全く異なったということ。今起きていることとその意味を捉えることの途方もない困難さ。

グループワークが特に深い学びに繋がった。多様な意見を聞けることが重要であると同時に、自分を組み直させる機会になる必要があるのではないかと感じた。塾生だけでなく、オブザーバーも。(むしろオブザーバーこそ。)



Q2:これまでの地域塾での取り組みを踏まえ、ご自身が1F廃炉を考える上で最も大切だと思う事柄(考えるべきことや議論すべきこと、焦点を当てるべきことなど何でも)について教えてください。

廃炉と地域社会との関わり方について議論したいです。

そこにいる人の意見を国が投影できていないということが問題の焦点であると思える。**ただこうするとだけ伝えられただけでは納得する人は少ない**だろうし、いくつか問題は残っているようにも見えると思います。

誰もが注目しがちな**「廃炉」の裏に隠れている、さらなる課題や問題、地域住民の思い**にはどのようなものがあり、どうやって対応していけば良いか。

地域の存続と他地区で暮らす人たちの今後。
廃炉技術(事故炉だけではなく)の確立と他社への廃炉支援。

納得できる廃炉を実現するために、**東電の人と地元の人**の廃炉や復興への**思いの違いを互いが理解すること。**

廃炉が社会づくり、市民社会教育に繋がること

現在世代の持つ課題とともに、**未来世代に事故の記憶をどう繋いでいくか、その両輪**

Q2:これまでの地域塾での取り組みを踏まえ、ご自身が1F廃炉を考える上で最も大切だと思う事柄(考えるべきことや議論すべきこと、焦点を当てるべきことなど何でも)について教えてください。

1) 1号機内部調査で新たに分かってきている事故炉の脆弱性を筆頭に、現在進行中の原発事故を安定化させるために必要なこと、再び危機的状況になった場合の作業員および周辺住民を守るために必要な備えについて。遺構化の話は、そうしたことから目をそらす事にならない限りでは必要と思いますが、何よりも、**さらなる危機の防止と人の生命を守ることが重要**と考えます。

(* 残すということに関して私が今重要と考えるのは、**この事故の真相究明をするための重要な資料の保存**です。刑事裁判が2度の検察審査会を経てやっとのことで実現したのを観れば分かるように、証拠は、放っておけば、隠され、廃棄されます。**事実関係をきちんと究明することがまず重要なこと**だと考えます。)

2) **廃炉作業にあたるたくさんの作業員の方々(半数以上が福島県民と聞きました)の処遇が極めて重要**と考えます。現在のような多重下請け構造で、賃金や危険手当の中抜きが横行し、疾病にかかっても労災認定のハードルは高く、又認定されても、東電は補償しないという状態は、人道上許されないことだと思います。退職後も健康追跡調査と医療保障、疾病の早期発見と早期治療、疾病にかかったときの補償なども含め、考えるべき事は多くあると感じます。

3) **廃炉プロセスに住民や市民社会が参加するしくみづくり。**

4) **地域を中心に考えると、そこから立ち退かざるを得なかった住民の方々の姿は震んでしまうように感じました。元々そこで営まれていた人々の暮らし、引き継がれていた文化や伝統、知恵、そうしたものを掘り起こし、記録し、何らかの形で引き継いで行く、ということが、「復興」ということの中に含まれている必要がある**と感じます。

5) 地域が負った集合的トラウマからの回復。分断の傷をブルドーザーで地ならしして、**新しい住民がやってきて新しい街を作る、ということではない、「復興」の可能性。**

6) 被災地に、デュアルユースの技術開発研究拠点ができるなど、**住民の多くがその地におらず、疲弊している間に、本当は望まないものがまた入り込んでいるのではないか。歴史が繰り返しのコースをたどることを望まないのだとしたら、この原発事故から何を学び、何を価値として社会を構築していくのか？ その主体は誰なのか？** そうした議論が必要と感じます。

Q3:(今回の地域塾での取り組みを踏まえて)今後も1F
廃炉や復興について考える
「対話の場」を創るとしたら、
どのような場づくりをしたい
か/どう継続すればより多く
の人が参加しやすいか、ご
自身のアイデアを教えてください。

今回のように、年代・職業・出身など様々なことが違う人と交流する場は継続する必要があると思いました。今回は廃炉について学びたい人達の対話の場でしたが、廃炉について興味・知識が全くない人と、知識の共有から始まり、別の観点からの意見も聞ける場があるとよりよくなると思います。

zoomでも参加はできますが、やはり集まる場所があれば、直接話すことができ、議論も盛り上がりやすくなると思いました。

世代、性別、人種を超えた、誰でもふらっと話し合いに参加することができる場、誰の発言も受け入れることができる場作りを行い、オンラインをさらに充実させる、テーマを誰でも考えることができる堅苦しいものにしないなどをすれば良いのではないかと考えます。

Q3:(今回の地域塾での取り組みを踏まえて)今後も1F
廃炉や復興について考える
「対話の場」を創るとしたら、
どのような場づくりをしたい
か/どう継続すればより多く
の人が参加しやすいか、ご
自身のアイデアを教えてください。

世代、性別、人種を超えた、誰でもふらっと話し合いに参加することができる場、
誰の発言も受け入れることができる場作りを行い、オンラインをさらに充実させる、
テーマを誰でも考えることができる堅苦しいものにしないなどをすれば良い
のではないかと考えます。

福島県外の高校生にも知識を得て関心を得てもらう場があってほしい。1F見
学に多くの人に来てもらいたい。

境界知作業者を目指そうとする者が(それぞれの考えに基づく)地域の自立や
1F廃炉に関して実証実験を行う。

廃炉という答えのない巨大な課題に対峙するのだからこそ、参加する者自身
が学び続けられる機会がある場にしたい。

Q3:(今回の地域塾での取り組みを踏まえて)今後も1F廃炉や復興について考える「対話の場」を創るとしたら、どのような場づくりをしたいか/どう継続すればより多くの人が参加しやすいか、ご自身のアイデアを教えてください。

事故から11年半。私はようやく、意見や価値観の異なる人々の言葉に耳を傾けてみたいという気持ちになりました。それほどの傷を一人一人が負い、まだその痛みの中に生きている人は多いと感じます。政府や県などから発せられるく復興>の「大きな物語」では救われない人々がたくさんいると感じます。自分が大切にされていない、希望が見えない中で、死を選ぶ人も残念ながらたくさんいます。

分断と痛みの中で「対話」の場を安全な場として作るとは本当に大変なことだと思います。それでも、そうしたことが、傷からの回復と未来への力になっていくと信じられる人たちで、この場を続けて行かれるとしたら、それは本当に大きな意味のあることだと思います。大きな意見の違い、激しい感情も、受け止められる器になっていけると願ってやみません。そうしたものを扱えるプロセスワーカーをファシリテーターとして迎えるということは大きな意味があると思います。

また、頭(思考)だけではなく、身体の知恵や心の空間にアクセスすることも取り入れると、より実りがあるのではないかと思います。U理論には、そのために使えるツールがいくつもあるので、そうしたものを使っていくことはとてもよいのではないかと思います。

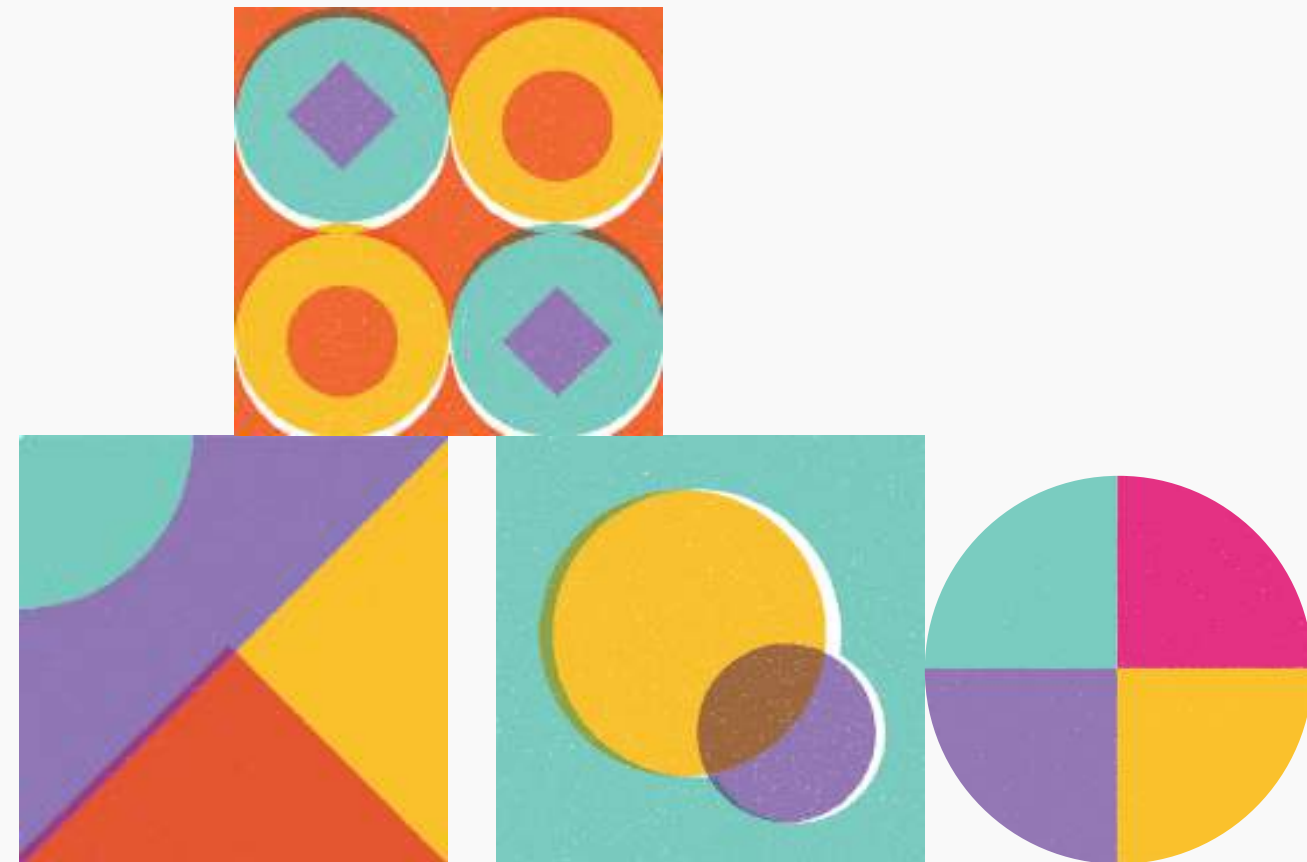
この地の古来からの言い伝えや文化を味わい体験する機会や、芸術活動などを取り入れるとよいのではないかと思います。

The background features several abstract geometric patterns in the corners. These patterns consist of overlapping circles and semi-circles in a variety of colors including orange, purple, yellow, teal, and pink. The patterns are tilted at various angles, creating a dynamic and colorful frame around the central text.

1 F地域塾を振り返って

Fグループ：馬屋原、藤城、熊田、渡邊、
行木、白土、星野、松本

目次



(1) 廃炉の先・将来像について今考える
こと

(2) 地域塾に参加して得た新たな学び、
思いがどう変化したか

(3) 疑問が深まった、もっと知りたいと
思うこと

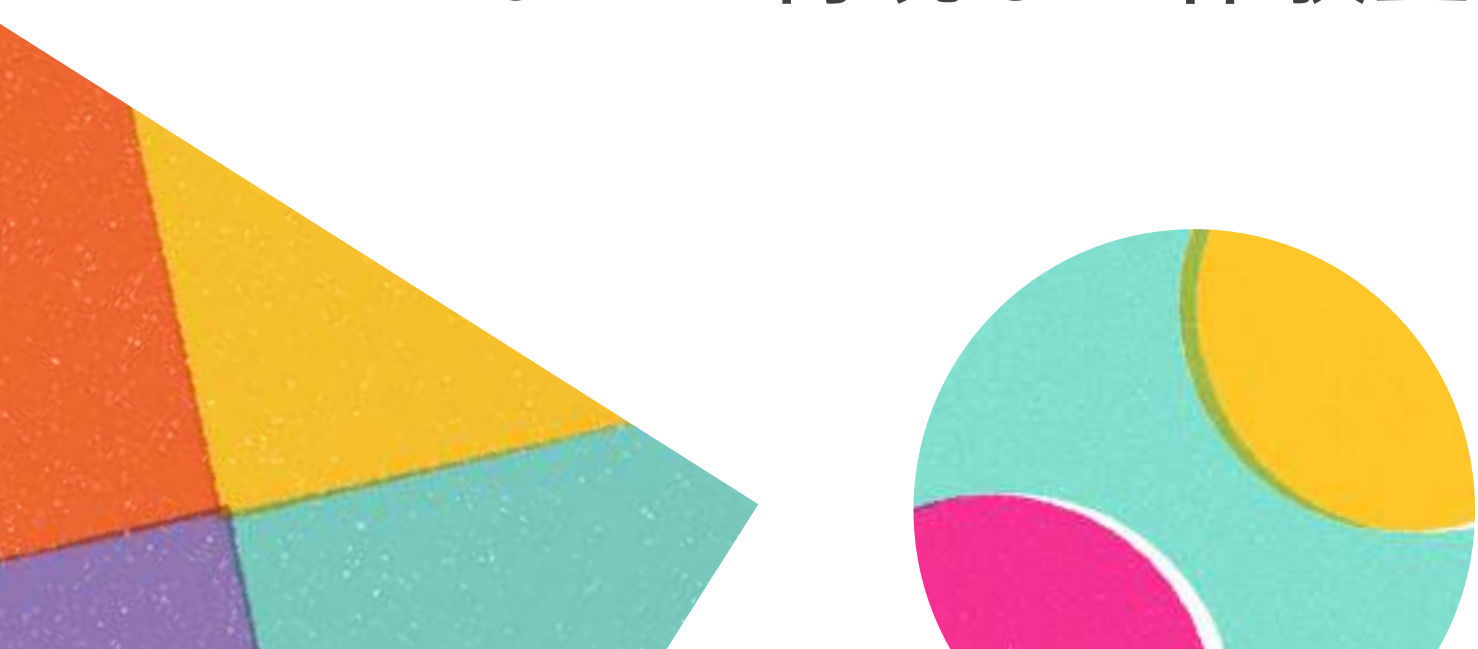
(4) これまでの議論をとおして

01 廃炉の先・将来像について 今考えること



「残す」という選択肢

- ・視察に参加して、「残す」難しさを痛感、でもやはり何とか残してほしい、
- ・1Fを文化財として残す意義は大きいものの、実際は燃料デブリもあり、難しいのではないかな？
- ・VRなどで再現して体験型学習ができるのでは



01 廃炉の先・将来像について 今考えること

- ・「残し方」を考えるとき、どこに立脚して考えるか。正解や不正解があるわけではない、すぐに結論が出せるものでもない
- ・「廃炉の先をどうすべきか」は分からないが、少なくとも政府や東電からのトップダウンではなく、地域住民とも共に考えることが大切、「ひと対ひとのやりとり」
- ・原発事故をどう継承していくか。
→建物のレプリカ、資料館

02 地域塾に参加して得た学び

- ・ 地域塾を機に関心が持てるようになった
 - ・ 世代やバックグラウンドの異なる人たちと話せてよかった
 - ・ 「廃炉」以外にも「残す」という選択肢を知れた
 - ・ 廃炉に関して、「もう10年」から「まだ10年」
 - ・ 地域の人々の複雑な想いをより知ることができた
- 出身地を明かすことができなかった
- ・ 11年経っても議論すら話すことすらできない/しない人もいる
 - ・ 廃炉について話すとき、「廃炉」ではない言い方で話せたらよかった。廃炉の話は政治的でもあるが、地域の話、ここで生きた人々、生きてゆく人々、関わる人の話でもある

02 地域塾に参加して得た学び

- 
- 
- ・地域住民が廃炉作業に関われていない、イノベーションコースと構想など十分理解ができていないままに、フックウが進んでいる
 - ・行政による地域の分断
 - ・復興の状況にも地域差があり、震災の経験も思いも一人一人違う、地域塾のような対話の場にも来れない人もいるなかで、誰1人置き去りにすることなく共に生きていけるか
 - ・「原発の将来像」よりも「浜通りの将来像」と捉える方が良いのでは
 - ・果たして住民全体が廃炉作業のアレコレを熟知し理解する必要があるのか、それぞれの役割で関われば良いのではないか
 - ・そもそもみんな"本気"で取り組んでいるのか
- 
- 

03 疑問が深まった、もっと知りたいこと

「廃炉作業」

- ・ 廃炉作業の地元受注
- ・ 処理水の海洋放出における海外の反応
- ・ 原発新設の安全性
- ・ 汚染土の県外活用

03 疑問が深まった、もっと知りたいこと

- ・ 東電や官民合同チームで受注支援をしている他、受注に向けた受け皿組織ができているので、その活用を注視したい
- ・ 水酸化ナトリウムの燃料プール冷却が妥当なのか
→ 水酸化ナトリウムは人体に有害で、水に溶けると発熱するのでは？
- ・ 廃炉作業について、地域の人はどう思っているのか、政府が勝手に決めていいのか
- ・ 「継承」とは何を継承するのか、廃炉作業のみ？原子力災害については？

03 疑問が深まった、もっと知りたいこと

- ・ “復興”とは？
- ・ 少しでも地域に貢献したいが、どういうプロセスが良いか
- ・ 前回の東電の方のぼやきが印象的だった。もっと人間味を出してほしい、こういった声にも耳を傾けるべきでは？
- ・ なぜ市民や国民にどうするかを決めることができないのか。イノベーションコースト構想もどれくらいの人々が理解しているのだろうか
- ・ 重く、難しい話で話しにくいことは事実だと思う。腹を割った話ができるようになるまでは事態は良い方向に進まないのでは？
- ・ 広島原発と福島原発事故

04 これまでの議論をとおして

- ・立脚点を変えての議論や、「残す場合」「残さない場合」などケースを絞っての対話、立場を入れ替えての対話
- ・ワールドカフェ形式や興味ごとの集まりでの対話など全体対話で進めていく時間も大切なのでは
- ・企画主体の変更など、よりフラットな関係性な場づくり

04 これまでの議論をとおして

- ・ GMの立ち位置、役割
- 書記、ファシリテーション、塾生、
- ・ 議論の時間が足りなかった
- ・ 機械の不備
- ・ フラットな関係づくりの必要性
- 回によってはオブザーバー中心の会話になったり、塾生が十分に話せていない時があった
- ・ 対話が「聞き手」と「話し手」のインタビューのようなものになってしまっていた



ご清聴ありがとうございました

